

1 章

「武」の字の意味

今日行われている柔道や剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道を総称して「武道」と呼ぶ。この武道の「武」という文字の意味はそもそも何であったのだろうか。

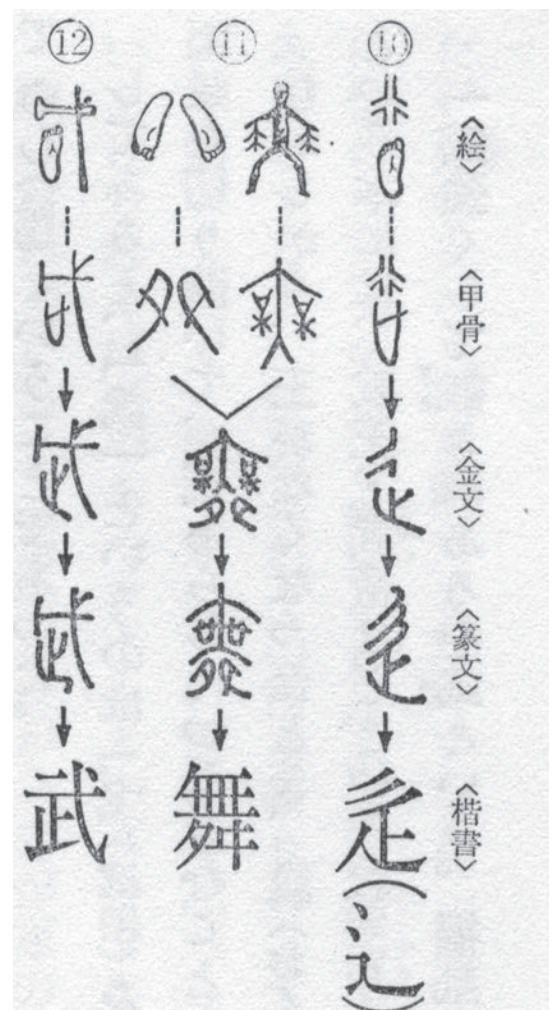
●「武」の意味

漢字語源研究者の藤堂明保は、「武」の本来の意味は「『戈（武器）＋止（あし）』の会意文字（資料1）であり、人が戈を持って足で堂々と前進するさま。無い物を求めてがむしゃらに進む意味を含む」と述べている。これを裏付けるように、中国では王様が亡くなったときに付けられる、武王といったおくり名は「威強くして戦乱を治めることを武という」に由来し、みな荒々しく勝ち取る意味があったのである。

今日でも「武」に関する用語には、武力は戦^{いくさ}をする力、武士は戦う兵士、武勇は武力が強く勇ましいことなど、いずれも強くて殺伐とした意味がうかがえる。そして「武」に術の字を付けると武術となり、我が国では武士の稽古した剣術や柔術、槍術、弓術などを総称して武術・武芸と呼んだのである。

このような「武」のもともとの意味が、中国の春秋戦国時代になると「戈を止める」と解釈されるようになる。こうした解釈がとられたのは、儒教の徳をもって政治を行う（徳治主義）が儒家によって説かれたことによる。今日でも、武を説明するときには戈（武力）を止めると解釈する人が多い。つまり、悪者の武力を自らの武力で止めるのが武であるとか、自らも戈を収め相手にも戈を収めさせる道を体得することであると説明される。そのため、武道は勝負を争うだけでなく2人で技をこしらえるところに意義があり、競技を行わず「形」のみの武道もあるのである。

さらにもう一つ音からの解釈がある。それは「武」は「舞」であるという解釈であり、武器を持って神の前で舞うというものであった。古代社会は、多くの自然現象は人間の力の及ばな



資料1)「武」の漢字（藤堂明保『「武」の漢字「文」の漢字』徳間書店）

いことが多く、人々は神頼みをするしか手段がなかった。日本では神であり中国では天であったが、そうした超越者に祈願したのである。その際に、超越者の前で舞うことが武の意味であるというのである。

「舞」は、無の略字と両足で足踏みする姿の会意文字であり、無い物を得ようと足踏みをして神に祈る意味であり、これが「武」と同義というのである。相撲は、もともと「すまひ」「すまふ」といったやまと言葉に「相撲」を当てたものとされ、この「すまひ」「すまふ」は「相舞」という説もあるくらいである。

このように「武」の本来の意味はあったようだが、日本の長い「武」の歴史を見ていく時に、それぞれの時代にそれぞれの「武」の意味がふさわしいとみる方が良いように思う。

●「道」の意味

次に、「道」は「首（あたま）と道（すすむ）」を組み合わせた文字であり、頭を前方に向けて進んでいく「みち」の意味があった。そこで武道というと、武技を通して生涯にわたり事理一致（技と理合の一致）を求めていく道を意味するといえる。生涯 60 余度の真剣勝負をしたが一度も負けなかったという宮本武蔵（資料 2）は、『五輪書』の中で「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」と述べ、3 年間の稽古を鍛といい 30 年間の稽古を練と呼んでいる。鍛錬とは道を求めて稽古を続けることを言ったものであるだろう。

もう一つは人としての道を指すこともある。稽古を通して克己や礼節、思いやりなどの精神を学んでいくことを言ったものである。いわば、武道による人間形成であり、いつの時代にも大切にされる考え方であるだろう。武道にはこうした深い意味が流れているのである。



資料 2) 宮本武蔵の肖像画（『宮本武蔵「五輪書」 神子侃訳』経営思潮研究会）